

皆さん、こんばんは。本日はようこそお集まりくださいます、ありがとうございます。
今は2022年ですが3年後の2025年、大阪でちょっとビッグイベントがあるんですね。万博です。
2025年から数えて55年前の1970年にEXPO70、千里（せんり）で万博がありました。
私は小学生でしたが夢いっぱい、何回か行きました。まだ日本がすごく元気のあった時代です。
万国博覧会は、世界の国々が持っているその当時の最先端の技術を、一般市民に向かって公開する
会ですよ。日本が一番出していました。
アメリカ館では月の石が展示されてて、それ見るのに2時間待って、見るのは5秒くらいですよ。
「あの緑色の。」「ちゃう。その隣のや」って後で聞いてね、「じゃあ、俺は何を見てたんや」と。

その万博の盛り上がりというか、テーマソングの『世界の国からこんにちは』。
三波春夫（みなみ はるお/1923-2001）さんが歌ってました。歌詞のほとんどが「こんにちは。」
「こんにちは。こんにちは。西の国から。こんにちは。こんにちは。東の国から。
1970年のこんにちは。」なんやねんと。ま、歌いませんよ。歌いたいけど。

三波春夫さんは色んなコンサートやる時、必ず必ず言うキャッチフレーズがあるんですよ。
有名なキャッチフレーズ『お客様は神様です。』
「この言葉ほど誤解されている言葉はない」と彼自身が言っています。
お客様は神様ですから、お客様が言うことはどんな無茶ぶり・無茶苦茶な要求・どんな無理難題で
も「ははー」と頭下げて聞かなくなりたいな。
時々コンビニなんかで、たった数百円の買い物するのに、お客さんがエラそうに、天下取ってる人
みたいに。「おまえ、信長かつ！」みたいだね。で、おでんのジャガイモ1個とか。
「それくらいで威張るなよ」みたいだね。

あの言葉の元々の意味は、三波春夫さんによると「『お客様は神様です』は人間のことでない。
私の第一のお客様は芸能の神です。私は芸能の神に自分の歌曲という捧げものをしています。
だから、会場がいっぱいの時は張り切って歌い、お客さんがあまり入っていない時には手を抜いて
歌うというようなことはしません。私が聞かせている、捧げものをしている第一の相手・お客様は
神様だから。私は神に歌を捧げているので、客が満員であろうがスカスカであろうが、そんなこと
に影響されて手抜きなんかしません。」そう聞くと「深いな、この人。」

私は三波春夫さんをレツゴー三匹で初めて知ったんです。「じゅんでーす」「長作（ちょうさく）
でーす」「三波春夫でございます」パーン！（頭をはたく）
知りませんか？お笑い好きな人は「あれか！」となるんですけど。

もちろん、彼が言っている神は、聖書の神ではなく芸能の神です。でも、もし全世界の人がすべて、
共通の唯一の神イエス・キリストを礼拝する思いで仰いでいたら、どんなに平和で・平等で・いが
み合いが少なく・トラブル激減・円満な世界が実現するだろうかと思うんですよ。

今日 私が説明したいのは**千年王国の終わりに来る最終の審判**。

千年王国は、全世界の人々がイエス・キリストを王として畏れ・崇め・従っていく世界です。

この千年王国の終わりに、2つの大事件が起こります。

①**ゴグ・マゴグの戦争**。後で説明します。エゼキエル戦争とは違う戦争です。

②**白い御座の裁き・裁判**。おそらく皆さんにも関係があるでしょう。これが**最終の審判**。

一般的によく言われている最後の審判。多くの宗教音楽や宗教絵画のテーマになっている、外すことができない最後の審判。恐るべきところですが、今日はそれを語らなければなりません。

裁きのことを口にするのはちょっと気が重いのですが、どうしても語らなければならないんです。

千年王国はもう素晴らしい世界。完全な健康・完全な天候・完全な繁栄・完全な平和・完全な正義・完全な公正によって支配されている、「天国が地上に下りて来たの?」と言いたくなるような理想世界が1000年間続きます。

そんな素晴らしい世界がなぜ1000年間も続くのかというと、3つの条件が揃っているからです。

1) 千年王国 (メシア的王国) に君臨している君主/王はイエス・キリストである。

ルソーかチャーチルかだれが言ったのかどうしても思い出せなくて、さっきからずっとネットで調べたんですけど分からない。もし分かったら教えてください。

最高の統治システムは何か。私たちは民主主義が一番良い統治システムだと思っているでしょ。

「そら、独裁主義よりなんぼかええわ」と思っているかもしれません。

確かルソーだったと思うんですが、最高の統治システムは、完全な能力・完全な人格・完全な権威を持っている者が王として独裁政治・君主政治をすることである。しかし、完全な能力・人格・権威を持っている人なんて実際には存在するはずがないから仕方なく、ずいぶん落ちるシステムだけど民主主義をやる。

民主主義は最高じゃない。だって、民主主義で変なことがいっぱい決まるじゃないですか。

100人のうち99人が色盲で、私のネクタイの色(*青)は何色ですかと多数決で決めたら、赤になるかも分からへん。多数決はいつもいつも正しいわけではないですよ。

中には変な提案する人もいないじゃないですか。

今、安倍晋三(あべ しんぞう)元首相を、手製の銃をぶっ放して殺した山上哲也(やまがみ てつや)容疑者、というか犯人の助命嘆願の署名、ムチャクチャ集まってるでしょ。

助命嘆願ってね、まだ刑決まってない。刑決まってから「それ軽くしてください。」

まだ刑決まってない。11月29日までは精神鑑定やるんですよ。それまでは警察も捜査でけへん。

選挙の応援演説という自由民主主義の政治活動の中で根幹を成すものを、銃をぶっ放して殺したというのはテロじゃないですか、これ!

日本の歴史でも世界の歴史でも、自由な政治活動の最中にテロでぶっ殺して、それを助命嘆願したら、その後国がどうなっていくか。滅びますよ。ドイツの例でも。

今日お帰りになったらぜひ、ごうチャンネルをご覧ください。今晚挙げましたから。

515事件でどんな事があったのか話しました。日本の歴史の中で「それはやったらあかんやろ!」

温情で罪を罪として断罪しなかったために、その後日本がどんなに傾いて行ったか。大化の改新以来、日本の歴史の中でいくらでもあるんです。それをまたやってる。民主主義・民衆の意見というのは、いつもいつも正しいとは限らない。一番良いのは、人格も能力も権威も比べ得るものがない、神のような存在が君主として治めることだと言うのです。

千年王国は、キリストが君主として、王の王として、世界の隅々に至るまで支配します。その時 主を知る知識は、水が海を覆っているように地を満たすであろう。神についての知識が全世界にみなぎっている。そして、キリストの権威が海から海へ至り、世界中の王はキリストにひれ伏し、世界の国々はキリストに従い、地は神の栄光で満ちる。本当に理想的な王である方が君主となられる。

2) 千年王国が始まった時点で、全国民が全員信者。

なぜ千年王国が素晴らしい統治になるのか。7年間の艱難時代の後75日間の猶予期間があり、その後千年王国が始まります。それからやがて新天新地/永遠の世界。千年王国、至福の地上天国みたいなところに入ることができる人たちは3種類です。

①艱難時代の前に携挙されたクリスチャンたち

携挙とは、キリストが迎えに来てクリスチャンたちが天に引き上げられることで、その時、この体が栄光の体に変わるんですね。

私は先々週まで長野県の菅平（すがだいら）にいました。そこのヘルモン山荘の周りを散歩してたら、地面に馬糞みたいな黒いものが10か所くらいポンポンと。土が盛り上がってる。そこだけ色が違うんですよ。熊のウンコちゃうかと。一緒に案内してくれた学生に「ちよっ、これ何なん？大丈夫か？」「これ、モグラの巣です。」「ここ、モグラおんのか！」「なんぼでもいますよ。モグラは地面を掘って、それを自分の巣の上に被せてるんですよ。」「ちゅうことは、これ掘り返したらモグラ出て来るか？」「出て来ますよ。」「やっていい？」「モグラは日の光を浴びたら死ぬんです。時々、干からびてるモグラいますから。」

皆さん、地面の中に1週間埋まったら体が腐りますよ。モグラは表に出て来たら死ぬ。地中に住むのに一番良い体をしてるんです。地面の中で生息する生き物には、地面の中という環境に順応している体を神が与えました。

私たちが永遠の天国で過ごすには、永遠の天国用の体が必要です。これを栄光の体と言います。携挙される時、クリスチャンたちは天国に引っ越しするだけじゃなく、この体が罪を犯さない体・天国用の栄光の体に変えられるんですね。変えられて天に行ったクリスチャンたちは千年王国の時に戻って来て、この地上で1000年間キリストと共に世界を支配します。そう書いてあるんです。

②千年王国の前に復活した人たち

神を信頼したすべての人間は千年王国の前に復活します。旧約時代の信仰者たちも艱難時代の殉教者たちも、この段階で復活して栄光の体になるんですね。彼らも千年王国に入ります。

③ 艱難時代のサバイバー

7年間の艱難時代、イエスを信じていて殉教せずに生き残った人たちがいるんですね。

その代表は144,000人のユダヤ人たち。

そして、異邦人で艱難時代に聖書の預言を聞き、144,000人のユダヤ人たちから福音を聞いて信じて、命からがら隠れおおせたのか、色んな方法で生き延びた人たちも千年王国に入ります。

この人たちは殉教していないので復活しません。生身の体のままで千年王国に入り、1000年間生きます。千年王国の環境は今の環境とは全く違うので1000年間生きるんです。

千年王国がスタートする時点で、そこに入って来るメンバーは全員、キリストを王として信じている人です。全世界の国民全員がキリストを信じている。だから、喜んでキリストの統治に従います。

千年王国では、復活の体を持っている人は結婚しないので子孫はありません。

しかし、生身の体で入った人は結婚するので、子孫が2代目3代目10代目40代目、人口が増えて行くんですね。1000年間、実に素晴らしい統治が続く。

3) 人類を誘惑し続けて来たサタン/悪魔が1000年間、底知れない所/アビス (ギリシア語) に閉じ込められていた。

この間、まだクリスチャンじゃない声優を目指している若者に「声優って、顔映れへんやん。」
「顔なんかいいんです。声で勝負です。高原さん、なりたいと思ったことありませんか？いい声してますよ。」ほめられても全然嬉しくない。「俺やったら、映る方がええわ」とか言うてね。

で、アビスの話になったんですよ。終末論で。「アビスは底知れぬ穴や。サタンが1000年間閉じ込められた。」「ええーっ！アビス知ってる！高原さん、メイドインアビスって知ってますか？」
「メイドインアビス？なんだんねん？」『メイドインアビス』というアニメーションがあると。
「今まで生きて来て、最高傑作と思います。」今まで生きて来てって、十何年しか生きてないのに。

直径1メートルの穴が地球の地下までグワーツと開いてる。その穴の周辺に孤児たちがいて、穴の深い所から色んな物を拾って来て、それを売って生活しているという、なんか変な。

フィリピンのゴミの所のと、ちょっとリアル感あるなと思ったんですけど。

「高原さん、絶対見てください！絶対ためになるから。」どうやって見たらいいか分からへんねん。

さて、サタンが御使いによって鎖でがんじがらめに縛られ、1000年間アビスの中に放り込まれて全く活動できなかったのが、1000年間実に素晴らしい王国が続いたのですが、千年王国の最後、いよいよ問題が生じます。

黙示録 20 章

7 しかし、千年が終わると、サタンはその牢 (アビス) から解き放たれ、

1000年間は牢の中に入れられていたのですが、1000年の終わりにその牢屋から解放されます。解放されたサタンは何をやらかすのか。

8 地の四方にいる諸国の民を、すなわちゴグとマゴグを惑わすために出て行き、戦いのために彼らを招集する。彼らの数は海の砂のようである。

再びキリストに戦いを挑むんですね。

ここから分かるのは、サタンというのは、どんな懲らしめを受けても性質が変わらない。1000年間がんじがらめになってアビスに放り込まれ、「絶対に神にはかないっこないんだ！反省！」…あり得ない。解放されたら、時間を無駄にすることなくすぐさま人々を誘惑し、キリストに歯向かわせるための活動を始めた。

昔読んだニュースで、ブラジルの大富豪の家にギャング団が強盗に入ったんです。ところが、警備システムが作動して、ものすごいサイレンとサーチライトにびっくりした強盗団は、蜘蛛の子散らしたみたいに逃げるのですが、その中の1人がその邸宅のプールに落ちたんですね。この強盗は泳げないんです。「泳げないんだ！助けてくれ！」主人は哀れに思い、ロープが付いた浮き輪を投げて、そいつが掴んだ。それを手繰り寄せ、プールサイドに引き上げたその瞬間、襲いかかって来たんです。

主人はどうしたか。ドーン。もういっぺん突き落とした。「泳げないんだ！助けてくれ！」「さっき助けたやん。おまえ、襲いかかったやん。」だけど、自分のプールで水死体って気持ちええもんじゃない。それで引き上げてやったら、また襲いかかって来た。結局、ガードマンに羽交い絞めにされて捕まったんですけど。

サタンは1000年間アビスに閉じ込められて、ちょっとは改悛したのか。ちょっと反省心が芽生えて「やっぱり神様には逆らえない。1000年掛かって学びました。」…なれへん。本質がもう悪魔なんです。変わらない。なので、すぐさまやったことは、[四方にいる諸国の民を惑わした](#)。

しかし、この惑わして無駄じゃないですか。この1000年間は、日本の戦国時代の「こんな乱世、誰か終わらして。こんな時代が続くの耐えられない！」じゃない。この上もなく素晴らしい1000年間なんですよ。みんな満足してる。キリストによって素晴らしい統治を経験している。そんなところで「キリストに従うの、やめとけ、やめとけ」という惑わしは失敗に終わるじゃないですか。

・・・大成功するんですよ。だって、[彼らの数は海の砂のようである](#)と書いてある。スタートの段階では、全国民がキリストを信じている。ところが、サタンが出て来た時に、子孫たちの中で、その誘いにまんまと乗っていく人たちが出るんです。この世界は素晴らしい、というフリをしていたんですね。こんな事ってあるのかなあ。なんぼでもあります。

旧約聖書の話。イスラエル国はある時から王国になります。王政を採るんですね。初代王はサウル。その娘婿がダビデ。ダビデは非常に信仰的で働き者で忠実。そして、彼が戦いに出ると連戦連勝・百戦錬磨。ダビデの活躍でサウル王国はますます強くなって行く。なので、これはサウルにとって喜ばしいこと。有能な部下を持つのは素晴らしいことですよ。

ところがある時から、「王である私よりも、部下ダビデのほうが国民に人気がある。『ダビデは素晴らしい。サウルは千を打ったがダビデは万を打った。』これ、聞きようによったら、ダビデのほうが10倍も実力あるように聞こえるし。」ジェラシー。嫉妬。男の嫉妬、怖い。権力者の嫉妬、もっと怖い。

ダビデは目の敵にされます。次々にヒットマンを放たれたり、「あそこにダビデがいる」と言われたら軍隊が行く。もう追いかけて回されて、九死に一生を得るといのが連続であるんですが、ダビデはどんなにサウルに追い詰められても仕返ししない。「あのサウルの野郎！」とか言わない。

「主によって油注がれた人に手を下すことはできない」と言って、非常に敬虔でした。

やがて、サウルが死にます。周りの敵軍は黙ってません。

そしたら、全イスラエルがダビデのところに行って、「サウル王がいた時ですら、あなたは実質的にこの国を治めていたのも同然でした。どうか私たちの王になってください！」

みんなに請われて、ダビデがイスラエルの王になりました。そうして、空前の黄金時代を迎えます。

ところが、あろうことか、ダビデの息子が父親に歯向かってクーデターを起こしたんです。

ダビデは都落ち。「私が王だ！」とお父さんを権力の座から追い出して、自分が次の王になると。

ダビデは泣きながら、エルサレムから都落ちして行きます。

その時、彼を徹底的に呪う人 シムイが出て来るんですね。シムイは元々サウル王家の一族です。

「出て行け！出て行け！血まみれの男め！我々サウル王家の血を流しやがって！」

流してません。ダビデはサウル王家の人たちの血を流さないように、細心の注意を払っていました。

シムイはダビデを呪って、石を投げたり土を掛けたり。

ダビデが全盛期の時はみんなが「ダビデの政治ってええわあ。ダビデのような名君に治められたら、この国強くなって素晴らしい！」

でも、サウル王家一族から見ると「もし今もサウルが王なら、俺もっとイイ立場に就けたやん。」ダビデが良い政治をすればするほど、ダビデの統治が素晴らしいものであればあるほど、サウル王家の人たちは腹立ってたんです。癢に触ってたんです。

だからダビデが失脚したら、ここぞとばかりに嵩にかかって「呪われよ！」

口汚く罵って、ストーカーみたいにずっと付け回した。ダビデが良い悪い関係なし。

ダビデが嫌いなんです。この人。

千年王国・イエスの統治は、ダビデの統治よりも無限大倍 素晴らしいですよ。千年王国。

だけど面従腹背（めんじゅう ふくはい）。顔（面）では従っているけど、心（腹）では「おまえの統治なんか見たくないんや。」

千年王国ではキリストがエルサレムで王として君臨し、みんなが素晴らしい統治を見るのですが、心密かに「俺、それ要らないねん。キリスト中心・神中心って、俺、それ見たくない。」腹の中でそう思っている子孫たちが実際はいた。しかも、[海の砂のよう](#)にたくさんいた。

クリスチャンの親から生まれた人が、自動的にクリスチャンになるんじゃないんです。

信仰は家の宗教じゃありません。うちは浄土真宗。うちは真言宗。うちは天台宗。家の宗教。

日本では、その宗教の家に生まれたら自動的にそこの信徒になる。

でも、聖書では信仰は個人的なものです。神とイエス・キリストに繋がる選択をしなければならないんです。だから「私、自動的に5代目のクリスチャン」とか、そういうわけにはいかない。

千年王国で、今まで選択の余地がないから従っていたけど、キリストに反対する組織が出来た時、率先してそれに加わる人たちがたくさん出て来た。残念です。これがゴグとマゴグの戦争です。

9 彼らは地の広いところの上って行き、聖徒たちの陣営と、愛された都（エルサレム）を包囲した。

なぜ愛された都（エルサレム）を包囲したのか。

千年王国の、いわばホワイトハウスはエルサレムにあります。イエスはエルサレムから世界を統治しました。そこをいきなり狙った。すなわち、イエスを追い出して、もう一度サタンが支配する世界を造ろうとしたのですが、その結果は実にあっけない。

すると天から火が下って来て、彼らを焼き尽くした。おしまい。

実に無謀な・愚かな・バカげた反乱だったと言えるのです。

ところで、8節にゴグとマゴグと書いてありましたね。ゴグとマゴグの戦争。

ゴグとマゴグと言えばエゼキエル書 38 章のエゼキエル戦争を思い出します。

でも、エゼキエル戦争は艱難時代の前に起こる戦争で、ここで言っている戦争は千年王国の最後に起こる戦争。別の戦争です。

なぜゴグとマゴグの戦争というのか。

ゴグはタイトルです。征夷大將軍・大統領・天皇・書記長、色んなタイトルがありますね。

ゴグは名前ではなく支配者の肩書です。マゴグはゴグに支配されている地域及び国民のことです。

ゴグとマゴグ。エゼキエル戦争でロシアがイランやトルコを引いてイスラエルに入ってくるけど、一日にして滅びますよね。そう預言されています。まだ起こってません。

そのことがあまりにも劇的だったので、後に至るまで語り草になるんですね。

エゼキエル戦争で、エルサレム/イスラエルを狙い撃ちにして入って来たのが、神の裁きで一瞬で全滅した。今回もその再現のようだ。

私たちは昔のことを引っ張り出して、今の大事件を説明することがありますよ。

「今度のプロジェクトはわが社にとって、まさに関ヶ原の戦いだ。」

「え、社長。岐阜に行くんですか？」って、そんなコト言う奴はおらんですよ。

これはね、「社運を賭けた、何が何でもコンペティションに勝たなあかん、絶対に取らなあかんプロジェクトや」いうことを言ってるわけですよ。

「で、小早川（秀秋）はだれなんですか？」そんなコトを聞く奴はね、アウト！ですよ。

“天下分け目の桶狭間”とか“天王山の戦い”とか日本の有名な戦いを、今の自分の人生の一大命運が掛かったような時に使ったことがありますよね。それですよ。

10 彼らを惑わした悪魔は火と硫黄の池に投げ込まれた。

そこには獣も偽預言者もいる。彼らは昼も夜も、世々限りなく苦しみを受ける。

千年王国の最後になって初めて、サタンはアビスからゲヘナに投げ込まれます。

火と硫黄の池・地獄・第二の死・火の池など表現は違いますが、最終的にサタンは滅ぼされる場所（地獄と呼ばれている所）に、この段階で投げ込まれるんです。

千年王国の最後の**ゴグとマゴグの戦争**の結果、天から火が降って来て、サタンに従っていた異邦人たちはみな滅びると同時に、サタンは**ゲヘナ（地獄）**に落ちます。

そしてこれ以降、サタンは二度と出て来ません。聖書にサタンが登場するのはここが最後です。人間を惑わし、不幸にし、苦しめて来た悪が、遂にこの段階でとどめを刺された。悪の根源が抹消された。これは喜ぶべきことですね。

サタンがゲヘナに入った時、先住民がおったんです。**獣（反キリスト）**と**偽預言者（反キリストの補佐）**。彼らは艱難時代が終わってゲヘナに投げ込まれている。つまり、サタンより 1000 年前にゲヘナに投げ込まれているんです。ここにサタンが揃って**悪の三位一体**。これが千年王国の終わりに来る 1 つ目のことです。

2 つ目は**白い御座の裁き**。黙示録によると、キリストは白い馬に乗って来られることが多いですね。白い馬に乗って。白い雲に乗って。ここでは**白い御座**に座っておられる。

11 また私は、大きな白い御座と、そこに着いておられる方を見た。地と天はその御前から逃げ去り、跡形もなくなった。

大きな御座はもちろん権威を表しますが、これから取り扱う裁判は非常に大きな裁判、全人類に対する裁判なんです。非常に重く重要な裁判。だから、大きな権威ある御座。**白い御座**。白いいというのは聖さ・正しさ。つまり、神の聖さに基づく裁判です。先ほどはサタンがゲヘナに投げ込まれたことでしたが、ここは全人類に対する裁きで、これが“最後の審判”と呼ばれているところです。

そこに着いておられる方を見た。この方は父なる神ではありません。イエス・キリストです。なぜそう分かるのか。

ヨハネ 5 章。

27 また父は、さばきを行う権威を子に与えてくださいました。子は人の子だからです。

28 このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞く時が来るのです。

これはキリストが弟子たちに言われている言葉で、最後の審判の場面なんですね。

「キリストは救い主じゃないんですか？」そうです。救い主です。

しかし、この**白い御座の裁き**で裁きの座に着いているのは、救い主としてではなく裁判官です。

今は人が罪を犯しても、神に対して弁護してくださるキリストがいますが、キリストが裁きの座に着いた時、キリストに執り成しをしてくれる人はだれもいません。なので、最終裁判なんです。

この最終裁判は千年王国の次にあります。どのような形で来るのか。

黙示録 20 章

11 また私は、大きな白い御座と、そこに着いておられる方を見た。

地と天（地球と全宇宙）はその御前から逃げ去り、跡形もなくなった。

キリストが**大きな白い御座**に着座されると天と地が消滅します。焼け崩れます。

つまり、**創世記 1 章 1 節**以前に戻るんです。

「千年王国は自然環境が良かったんじゃないんですか？」いや、それも古い天・古い地です。すべての天・すべての地、その事象が焼け崩れて、**白い御座**だけが残るんです。他に目移りするものが何もない。

そこに、だれが集められるのでしょうか。

12 また私は、死んだ人々が大きい者も小さい者も御座の前に立っているのを見た。数々の書物が開かれた。書物がもう一つ開かれたが、それはいのちの書であった。死んだ者たちは、これらの書物に書かれていることにしたが、自分の行いに応じてさばかれた。

死んだ人々。これは文字通り死を経験した人々ですが、同時に靈的に死んだ人々と私は取ってます。救いを得ずに死んだ人たち。自分の罪の問題を解決しないで死んだ人たち。その人たちが、**大きい者も小さい者も御座の前に立っているのを見た。**

大きい者は、生きていた時に社会的地位や政治的権力、色んなパワーを持っていた人ですよ。小さい者は無名の人たち。なので子供じゃない。天国に子供はいます。地獄に子供はいません。小さい者だから、幼い子供たちも地獄に行くのか。いいえ。子供は地獄に行かないです。みんな天国に行きます。

聖書に子供を比喻として使う場面がありますが、神の救いを示すために、子供になぞらえて語られていることが多いのです。「あなたがたは子どものようにならなければ、天の国に入ることはできない。子どものようになりなさい。」この人たちはみんな大人です。

彼らは**2つの書物**に基づいて裁きを受けます。

①数々の書物。複数形。これは各人の行いの記録です。

罪人はこの**数々の書物**の内容に基づいて、それぞれの裁きを受けます。

神様は私たちがしたこと・しなかったこと、言ったこと・言わなかったこと、どんな動機でそれをしたのか、全部記録しているんですね。

このメッセージはYouTubeで配信されているし、うちのPCのSDカードに記録されるんですね。人間が作った媒体でも、言った言葉を1つも落とさずに記録することができるんです。

人ですらも、行動や発言をつぶさに全部記録する媒体を作ることができる。

ましてや、全知全能の神は私たちの心の奥底までも見通した上で、私たちがしたことすべてを記録しておられる。ご存じなんですね。

②書物がもう一つ開かれたが、それはいのちの書であった。

いのちの書は人が生まれる時に、その人の名前が記される書物です。

しかし、罪の解決を得ずに死ぬなら、**いのちの書**から名前が消し去られるんですね。

旧約聖書に懇願の祈りがしばしば出て来ます。「**いのちの書**から、私の名を消し去らないでください。」はじめは載っていたのに「途中抹消することをやめてください。助けてください。」

罪人のままで死んだ人の名前は抹消される。

数々の書物を調べて。**いのちの書**を調べて。2人の証言は真実です。どこにもない。

死んだ者たちは、これらの書物に書かれていることにしたが、自分の行いに応じてさばかれた。自分の行いに応じてさばかれた。死んだら皆、同じ裁きを受けるのではない。裁きには軽重がある。

ある時キリストがユダヤ人に向かって、「ああ、コラジン。ああ、ベツサイダ。あなたたちが見たわたしのわざをツロとシドンが見たなら、彼らはとうの昔に悔い改めていたことだろう。しかし、あなたたちは見ても悔い改めなかった。裁きの日の裁きは、彼らよりもあなたたちのほうがもっと重い。」

みんながみんな同じ裁きではなく、それぞれの行いに応じて、完全にフェアな裁きである。ツロとシドン（ソドムとゴモラ）はイエス・キリストを見なかったし、奇跡も見なかったのですが、コラジンとベツサイダ、ユダヤの町々は、ものすごく多くの情報を見たんです。ツロとシドンが見なかったメシアを見て、メシアのしるしも見て、その上でノーと言った。

たくさん与えられている人がそれでも「ノー」と拒む時、当然、事の軽重が変わってくるのです。これを言うと、ちょっと脅しているみたいで言いたくない…けど、そうなんです。とても厳かなことだと思うんですよね。

では、どんな状態でキリストの前に立つのか。

13 海はその中にいる死者を出した。死とよみも、その中にいる死者を出した。彼らはそれぞれ自分の行いに応じてさばかれた。

海。どんな深海・海底に沈んでも、サメに食われて跡形もなくなって「これでは、もう出て来るはずがない」と言っても、そんなことはない。

海はその中にいる死者を出した。どこにいても、人は復活するという意味です。

海底であろうが、砂漠やジャングルであろうが、どこであろうが、白い御座の前に立つ時、魂だけが立つのではなく、復活して肉体と魂が合体した状態で立つんです。

死とよみも、その中にいる死者を出した。

私が尊敬しているウィリアム・マクドナルドさんによると、死はお墓のこと。

よみは死後に魂だけが行く所で、ギリシア語でハデス。

死とよみも。お墓からは復活のための体が出て来ます。よみ/ハデスからは魂が出て来ます。

体と魂が合体し、肉体を持った人間として白い御座の前に立つ。

海底で死んだ人でも例外はない。どんな人も白い御座の前に行き、キリストの前に立つ。

彼らはそれぞれ自分の行いに応じてさばかれた。

14 それから、死とよみは火の池に投げ込まれた。これが、すなわち火の池が、第二の死である。

それから、死とよみは火の池に投げ込まれた。

よみ/ハデスにいた魂はすべて復活して白い御座の前に行ったので、よみは空っぽです。

空っぽのよみと、死という目に見えない力が火の池に投げ込まれた。

クリスチャン向けの話になって、ちょっと難しくなるかもしれませんが、とても大事なところなので見ておきたいと思います。

第1コリント 15章

25 すべての敵をその足の下に置くまで、キリストは王として治めることになっているからです。

すべての敵の最後から2番目がサタンです。サタンは既にゲヘナに投げ込まれましたね。そして、最後の敵がいる。

26 最後の敵として滅ぼされるのは、死です。

サタンは千年王国の最後にゲヘナに投げ込まれ、死が白い御座の裁きの時に滅ぼされる。もはや敵はどこにもない。

27 「神は万物をその方（キリスト）の足の下に従わせた」のです。しかし、万物が従わせられたと言うとき、そこには万物をキリストに従わせた方（神）が含まれていないことは明らかです。

28 そして、万物が御子（キリスト）に従うとき、御子自身も、万物をご自分（キリスト）に従わせてくださった方（神）に従われます。これは、神が、すべてにおいてすべてとなられるためです。

ここに、白い御座の裁きの目的が書いてあるんですね。

結局、すべての敵がキリストに服従しました。すべてのものがキリストに従った後、キリストが神に従うことによって、神が、すべてにおいてすべてとなられるためです。

神がすべてのすべてとなられるための白い御座の裁き。

ちょっと難しくなってきました。分からない人は、これ飛ばしてください。いつか分かるようになりますので。

黙示録 20章に戻って、**地獄**はどんな場所なのかについて考えます。

ある人々は、地獄を拷問部屋みたいに想像してるんですよ。「なんで、そんなことするん？」

「神が火の中に人間入れて苦しめて、そんな楽しいんか！残酷やないか！」拷問部屋じゃないです。

地獄とはいったい何なのか。**ゲヘナ**とは？**火の池**とは？

火の池の火は比喻です。あるところでは**暗闇**と書いてます。火があつたら暗闇にならへんやん。神様の裁きを表す比喻が**火**なんです。

14 それから、死とよみは火の池に投げ込まれた。これが、すなわち火の池が、第二の死である。

15 いのちの書に記されていない者はみな、火の池に投げ込まれた。

白い御座の前に立たされた人はみな、最終的には火の池に行きます。

すなわち火の池が、第二の死である。

死の意味は何か。死はギリシア語でサナトス。分離・バラバラという意味です。

第二の死ということは、**第一の死**があるんですよ。

第一の死は、私たちがよく見る**死**です。体と魂がバラバラに分離するのが第一の死。

魂が体から抜けて行くこと。魂が体から離れ去って行くこと。分離すること。

第二の死は何か。分離した魂と体は、**白い御座の裁きの時**にもう一度合体するんです。復活ですよ。しかし、神と分離する世界に入ります。

地獄は、神がどこにも見当たらない世界なんですね。

聖書を見ると、神様は赦しの神です。赦しの神がどこにもいない。赦しがどこにもない世界。

聖書を見ると、神様は希望の神です。希望の神がどこにもいない。絶望しかない世界。

聖書を見ると、神様は愛の神です。愛の神がどこにもいない。愛も恵みも憐れみも一切、どこにもない世界。新約聖書で地獄について最も言及されているのはイエス・キリスト自身です。

なぜ、神がない世界に人は行くんでしょうか。

先ほどのシムイは、ダビデの素晴らしい統治を見たくなかったんですね。

ダビデが素晴らしい統治をすればするほど気に入らない。

同様に「神中心の統治を見たくない・神から離れたい」という人間の罪の願いが完全に満たされる世界が**地獄**。その願いが叶えられて、神がどこにも見当たらない世界。それは恐るべき世界。

その苦しみは、最も善き方を拒んだということの後悔に由来する苦悩ではないかと考えています。

拷問部屋じゃない。「神は要らない」と言ったその願いが完全に実現し、それを実際に味わった時、「なんとという大きな損失を選んでしまったのか！」という苦悩ですね。

黙示録を通して、今まで**終末預言**について話して来ました。終末預言は世界情勢に関する話ですよ。

これから世界がどうなっていくのかは聖書が預言しているし、その預言通りに動いて来たんです。

それによって「聖書は信頼できるんだ。終末預言はそのまま額面通り信頼していいんだ」ということが分かるのですが、今日の個所は個人の終末論です。

私たちは最終的にどこに向かっているのか。個人の終末論。**白い御座の裁き**とその後に続く**ゲヘナ**。

聖書が語っている限り、それは本当にあるということです。

なぜ、声を枯らして福音を宣べ伝え続けているのか。皆さんには何としても、ここに行ってほしくないからです。それは私たちの願いである以前に、神ご自身の願いなんですね。

では、どうしたらいいのか。**白い御座**の前に立った人は全員裁かれます。軽重を量るための裁きの座です。それを免れるためには、**いのちの書**に記されていさえすればいいんです。

15 いのちの書に記されていない者はみな、火の池に投げ込まれた。

どうすれば**いのちの書**に名前が残るのか。

ヨハネ1章12節 **しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる特権をお与えになった。**

これが**いのちの書**に名前が記されることです。

神の子どもとなる。養子になる。今までは神に反逆する者だったけれど、イエス・キリストを自分の救い主として信じる人は神様に引き取られる。神様の養子となる特権が与えられる。

神様の子供になる。それはキリストを信じることによる。

養子について、すごく心に残っている本があります。

女優のサヘル・ローズさんをご存じですか。イラン人です。イラン・イラク戦争で激戦地に家があって、確か14人兄弟ですが空爆で一家全滅。戦争孤児になってイランの孤児院に引き取られました。

あまりにも小さい時に孤児になってしまったので、自分の名前・生年月日が全く分からない。

ある時その孤児院に、フローラ・ジャスミンというイランの名家の女性が見学か何かで来て、サヘルさんと目と目が合ったんですね。サヘルさんはすーっと引き寄せられるようにフローラさんのところに行って、手をきゅっと握ったそうです。その瞬間「彼女を助けたい！」
養子にしようと思うのですが、当時は子供を産める体の女性は養子をもらえなかったもので、彼女を養子にするために不妊手術を受けました。

名前が分からないのでサヘル・ローズと。サヘルは砂漠。ローズは薔薇。
砂漠に薔薇なんて咲くはずがないのですが、戦場・荒廃した世界の中で、薔薇のように凜として生きてほしい。

ところが、自分の体をそのようにして孤児を引き取ったということで、名門の家なので絶縁されるんですね。イランに住めなくなって、お付き合いしていた男性が日本にいたので、来日してサヘルさんを育てるんです。しかし、家からの支援も何もありません。

サヘルさんも小さい時、顔立ちが日本人じゃないからとても虐められて、もう耐え切れない。死にたい。お母さんが家にいないと思う時間に早退して帰ったら、お母さんが、声が漏れないように枕に顔を押し付けて泣いてるんです。
「お母さん、もう耐えられない。死にたい。」「いいよ。一緒に死んであげる。」

その時、「辛いのは自分だけだと思っていた。でもお母さんは、私を引き取らなかったなら、今頃イランの名門の家でお嬢様としてぬくぬくと生活していたのに、私を養子にしたためにこんなに苦しんで…。絶対にお母さんを悲しませたらだめだ。」

ある時お母さんに聞いたんです。「なんで、私を養子にしようと思ったん？」
「そんなん理由要る？親を亡くして頼るところのない子が私をじーっと見て。私の手を握って来て。それ振り払える？私が差し出した手をちっちゃな手できゅっと握ってくれた子、絶対育てるべきでしょ。理由なんか要らないじゃない。」
血縁関係はないけど本物の愛に触れて、「どんな事があっても、ひねくれるものか！」と思った。

キリストは私たちが養子を迎えるために、いったいどんな酷い目に逢ったでしょう。
十字架に掛かれた。神から呪われた あの暗黒の3時間。
しかし3日目によみがえり、そして、私たちに提示しておられるのは、しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる特権をお与えになった。

今キリストは手を差し伸べて、「わたしの中に入って神の子供になりましょう。父なる神様のところに一緒に帰りましょう」と招いてくださっています。
終末論の希望はここにあります。福音がなければ、ただ怖いだけの話ですが解決があります。ぜひ皆さん、このイエス・キリストを信じてください。心からお勧めします。

^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^
*引用；新日本聖書刊行会『聖書 新改訳 2017』いのちのことば社